

小林隆児著

『よくわかる自閉症』「関係発達」からのアプローチ

評者・小倉 清



法研
本体一七〇〇円

この本の題名は正しくは「よくわかる子どもの精神科」というべきものではないか、ということをおまじ指摘しておきたい。

著者は長い間、自閉症の方々と接してこられた臨床医である。その歴史についてはこの本の中でもふれられている。そういう長い経験から到達されたさまざまな視点を本書は丁寧に、わかりやすくたくさん例をあげながら説明して説得力がある。いくつものことが述べられているが、まず自閉症についてこれまで、それを個の問題、たとえば脳の器質的な問題、個人の気質的な問題、知的能力の問題などとしてのみ扱われてきたわけだが、著者はそうではなく、個とそのまわりの人との関係性こそが本質的な問題であると主張する。そしてその視点から自閉症全体を見直してみようというのである。なぜ関係性に注目するに至ったのか、その経過も述べられている。臨床場ではいくつもの小さくてこまかな

ことにこそ注目する。それを見逃さない観察力がいかに大切であるかが述べられる。そこにはその人の生活史、成育史が必ずその背景にあるものなのである。そのうえで発達の関係性を重視するのである。それらがわかりやすくよく飲みこめるように教示されている。

本書は一般向けに書かれているのでそれなりの配慮がなされている。序章ではさまざまな概念・言葉・考え方の説明があり、各章がどんな意図で書かれているのかが示される。

関係性をとりあげる治療法として、mother-infant unitという特殊なやり方が四例をとりあげてこまかく説明されるが、これは専門外の人にもわかりやすいように図示される。

自閉症の基本的な病理について著者はアンビバレンス(一一七頁)にふれ「もともと備わった異常なほどに強い知覚過敏」からそれが起こると考えるという。でも私の考えでは、ごく早期の原初的な愛着体験がうまく身につかない

い結果として知覚過敏が起こり、そこに生じる悪循環そのものがすなわちアンビバレンスであるといいたい。では原初の愛着体験がなげうまうまいかなかったのか。赤ちゃんはまわりの人にまじらずに絶対的に依存する。しかし一般に依存される側の人には世代にわたる問題、夫婦間の問題、親になることについての問題などさまざまな事柄がある。赤ちゃんがごく早期において鋭い観察力を身につけざるを得ないにはそれなりの状況があるものなのである。

SSPの場面でも、子どもによって刺戟された母が、自分の赤ちゃん時代の体験の中に埋没したままの自分自身をそこに露呈してしまっていることが起こるのである(一一二〇―一一二二頁)。「甘え」は本質的にいつて二者関係であり、アンビバレンスを含む。「甘え」が受け入れられないところでは、回避、無視、攻撃、自傷などが起こりうる。このことをよく考えたい。

本書はまた臨床家がつべき根本的な態度についてもわかりやすく解説している。子どもが示す行動の背景をなしているものを理解しようとする。単に行動障害といわず、わからない行動・言動・強迫行為ともいわず、それなりの歴史があるものとして理解しようとする。人との関係という文脈のもとに理解しようとする。これは誠に

って大切な臨床的態度である。第七章・第八章は病理と治療について同時進行で述べられる。これは、精神科臨床のすべての場合にあってはまる基本的な認識と実践とを必須とする態度である。その意味で本書は実に啓示的な本であると思う。私が冒頭に述べたのはこのことを指している。さらにもうひとつ思うのは、治療者に求められる資質のことである。人は誰でも人としての成長のどの段階においてもそれ相応のきつい体験を余儀なくされる。だから今、治療者として行動しようとする人はつねに自分の過去における傷をそれとして認識し、それらと自分は今までどのような対応してきたのであったかを考えねばならない。その努力のあり方が治療者としての質をさらに高めるのか否かを左右することになる。患者がもつ苦痛に対して敏感に反応できるのかどうかは、そこにこそかかっているという認識をもつことがきわめて大切になるのである。その意味で本書に述べられている症例をよく読みこめば、そこから学ぶべきものは多い。

本書は臨床の初心者にとっても、また相応の経験をもった者にとっても、つねにこころをけるべきもの、忘れてはならぬものをきびしく提示してくれる書といえるべきであろう。

(おぐら・きよし/クリニックおぐら)